

## 2021年度の琵琶湖における餌料プランクトンの生育状況

森田 尚

### 1. 目的

アユ等の餌料生物として重要な甲殻類プランクトンの2021年度の生育状況を評価する。

### 2. 方法

毎月中、下旬に彦根港と安曇川河口を結ぶ線上の5定点で、目合95 $\mu$ mの北原式定量ネットを用いプランクトンを層別採取し(0-5mまたは0-10m、10-20m、20-40m、40-75m)、種別個体数を計数した。そのうち、①ケンミジンコ類のコペポディド期幼生+成体、②ダフニア属等各分類群の深度20m以浅ののべ8層分の個体数密度(個体数/リットル)の合計値を生息量指標値とした。ヤマトヒゲナガケンミジンコは、成体雌の画像を撮影し、個体ごとの頭部長、前体部長、一腹抱卵数を計測した。

### 3. 結果

図1に、ケンミジンコ類コペポディド期幼生+成体とダフニア属の生息量指標値の季節変動を、過年度5か年との比較で示した。2021年度は、いずれの指標値も4月から10月中旬までは過去同時期並みか多めに推移したが、その後減少し11月下旬ないし12月中旬には過去最低レベルになった。1月以降ケンミジンコ類は低水温下で緩やかに増加したが、ダフニア属は最低レベルで推移した。

図2にヤマトヒゲナガケンミジンコ成体雌の前体部長平均値の季節変動を過年度3か年との比較で示した。2021年度は10月中旬までは平均的なレベルを保ちながら小型化していく傾向を示したが、その後は過年度と同様に大型化し、11月中～下旬には2020年度と同等の大きさで2018、2019年度を上回った。一腹抱卵数も11月中～下旬には過年度よりも多く(図3)、この季節の個体レベルの生産力は過去より高めであったことが示唆された。

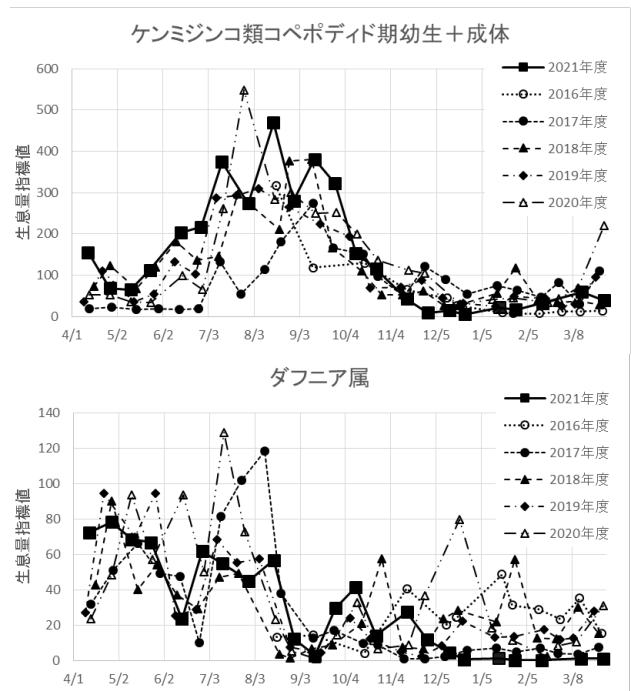


図1 各分類群の生息量指標値の季節変動

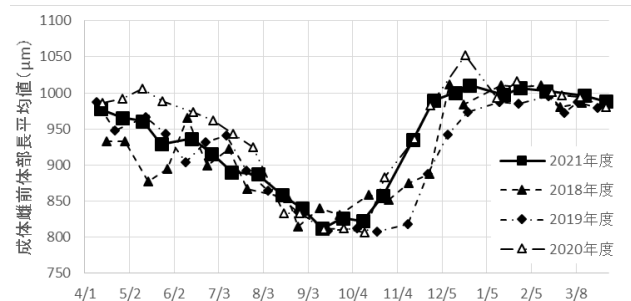


図2 ヤマトヒゲナガケンミジンコ成体雌の前体部長平均値(μm)の季節変動

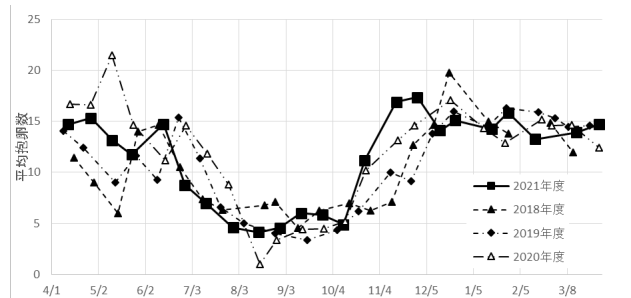


図3 ヤマトヒゲナガケンミジンコの一腹抱卵数平均値(個)の季節変動